

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：10103

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16729

研究課題名(和文)アイスランド語発音辞典データベース構築のための記述言語学的基礎研究

研究課題名(英文)Descriptive Preliminary Studies for Constructing Phonetic Database of Icelandic

研究代表者

三村 竜之(MIMURA, Tatsuyuki)

室蘭工業大学・工学研究科・准教授

研究者番号：00647662

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：臨地調査を通じて、本研究の課題であるアイスランド語の「アクセント」・「前気音」・「子音の無声化」に関して以下の事実を明らかとした：i) アクセントは語の構造を問わず、基本的には第一音節(左端の音節)に現れるが、全く例外が無いわけではなく、比較的新しい外来語や話者にとって馴染みの無い外来語の場合は例外的に第一音節以外にアクセントが置かれる；ii) 前気音の出現はアクセント(強勢)の有無と密接に関連する；iii) 子音の無声化は語中のみならず語と語の境界でも起こり得る。本研究課題に付随してイントネーションに関する興味深い事実が明らかとなった：疑問文の文末音調は一貫して下降調である。

研究成果の概要(英文)：Through the series of field researches the following three facts were revealed on the accent system, preaspiration, and sonorant devoicing in Icelandic: i) accent falls as a rule on the first syllable of a word, but accent falls on other syllables than the first in some foreign words which are relatively new and unknown to speakers; ii) it has been revealed that the occurrence of preaspiration is conditioned by the presence or absence of accent (stress); iii) sonorant devoicing phenomena may occur between a word boundary as well as within a word, which is unknown to the previous Icelandic phonologists. In addition to the present research project, another quite interesting fact has been obtained on Icelandic intonation: interrogative sentences always have a falling terminal tone regardless of their construction and whether they have interrogative pronouns or adverbs.

研究分野：言語学

キーワード：アイスランド語 音声学 音韻論 記述言語学 発音データベース

1. 研究開始当初の背景

アイスランド語はヨーロッパの言語史を考察するうえで非常に重要な言語であり、それ自体が学習に値する言語である。しかしながらアイスランド語を学ぶうえで有用な教材や辞書は未だに十分とは言えず、殊に発音に関する信頼できる情報源や教材(例: 発音辞典、データベース)は極めて乏しい。その背景には教育に応用可能な発音に関する資料や事実の蓄積が未だ不十分であるという状況が考えられる。特定の言語理論に基づくアイスランド語の分析ではなく、記述言語学的な立場から発音に関する正確な資料の収集と精緻な分析が急務である。

2. 研究の目的

上記(1)に示した背景を改善するためには、特定の言語理論に基づくアイスランド語の分析ではなく、可能な限り客観的な研究姿勢と手法に基づき豊富な資料を採取・分析する急務である。また、発音辞典編纂のための良質かつ信頼のおける資料と情報を提供する必要もある。以上のようなこのような、アイスランド語音声研究のおかれた状況を鑑み、以下の3つの見地に立脚する記述調査が急務であるという結論に至った: i) アイスランド語母語話者をインフォーマントとするフィールドワーク(実地調査)による資料収集; ii) 基礎語彙から外来語、複合語、派生語に至る多種多様な音声・言語資料; iii) 特定の理論的枠組みに極端に依拠することなく、得られた資料を過不足なく説明しうる規則や制約を導き出すという、記述言語学的な研究姿勢。

本研究課題では、特に音声教育の観点から、特に(日本語話者にとって)習得が困難であり、かつ未習得の場合には口頭による意思の疎通の妨げとなりうる「アクセント」・「前気音」・「子音の無声化」の3つの現象に研究対象を限定し、個々の現象に関して語源や構造の異なる様々な種類の語(固有語、外来語、単純語、複合語、派生語、アルファベット頭文字略語など)を資料として多量に採取し、当該現象の詳細な観察並びに記録を行う。また、当該現象の生起条件(現象が成立するための音声並びに文法的条件)の解明を行う。最終的には、以上の資料や資料を通じて解明される諸事実を基に、これらの現象の背後にいかなる規則や制約が働いているのか、またそれらが適用される(あるいは適用されない)条件はどのようなものかを詳察し、個々の現象を司るメカニズム全体の詳細を明らかにする。

3. 研究の方法

アイスランド共和国レイキャヴィーク市にて母語話者をインフォーマントとする実地調査を行い、言語資料を採取する。得られた資料の詳細な観察を通じて分析の基盤となる音声資料の整備を行う。その後、音韻論

的分析を行い、学習者にとって必須の情報である個々の音声の特徴やアクセント、またアイスランド語に特徴的な現象である「前気音」に関する分析と理論的諸問題の解決を試みる。音韻論的分析を補完すべく、必要に応じてコンピューター機器を用いた音響分析も行う。また分析の過程においては、分節音や韻律構造などの様々な音声・音韻的側面や、語構造、形態素の属性などの文法的側面から、個々の現象の生起条件に関して詳細な考察を行い、各現象を成立させる諸規則や諸制約の抽出を通じて背後にあるメカニズムの全体像を解明する。

音韻論的分析を通じて得られた知見は、査読制度の整った学会において口頭発表や投稿論文の形で公表するとともに、市販のデータベースソフトを利用し電子媒体として記録・保存を行う。

4. 研究成果

本研究課題が解明を目指していた「アクセント」・「前気音」・「子音の無声化」の3つの現象に関して以下の事実を明らかとした。i) アクセントは語の構造を問わず、基本的には第一音節(左端の音節)に現れる; ただし、従来唱えられてきたように全く例外が無いわけではなく、比較的新しい外来語や話者にとって馴染みの無い外来語の場合は、必ずしも第一音節にアクセントが置かれるわけでは無い。なお、アクセントの調査に付随して語や文のリズムについても調査を行い、従来唱えられているようなリズムの構造が必ずしも守られているわけでは無いことが明らかとなった。ii) 前気音に関しては、語のどの位置で、どのような音が組み合わさった場合に生じるかを明らかとした; 従来の研究で主張されていた条件と概ね同様の結論が得られたが、これまでの研究が扱ってこなかった複合語や派生語の調査を通じて、アクセント(強勢)の所在と前気音の生起が密接に結びついていることが明らかとなった。iii) 子音の無声化に関しては、これまでの研究が見落としていた文の資料を通じて、無声化の起こる条件をさらに精密に特定することが可能となった。

なお、本研究課題の研究調査に付随して、本来は予定をしてなかった興味深い現象が二つ発見されたため、並行して調査・研究を進めた。一つ目はイントネーションで、これまで明らかになっていなかった疑問文のイントネーションに関して詳細を明らかとした。英語や日本語の標準語など一部の言語では疑問文が上昇調で発音されると主張されてきたが、アイスランド語に関しては一貫して下降調が現れることがわかった。近年、日本語の諸方言に関しても同様に、疑問文のイントネーションが下降調であることが明らかとなりつつあるが、未だ解明されていない部分が多いイントネーションの研究におい

て、今回の調査で解明された事実は極めて意義の大きいものであると言える。二つ目は子音の脱落現象で、従来の研究では報告されていない新たな脱落現象が発見された。子音の脱落現象に関しては、当初の研究課題の遂行のため十分には資料の採取が実行できず、従って未だ明らかとなっていない点が多いが、新たな資料が発見されたことで、アイスランド語発音教育に求められる事実や知識の集積に重要な寄与がなされたと言えよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

(1) 三村竜之、東京工業大学多言語音声コーパス アイスランド語<その一> PBText コーパスについて、北海道言語文化研究、査読有、16巻、2018、99--112
<http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/journal.html>

(2) 三村竜之、アイスランド語疑問文イントネーションの諸相、室蘭工業大学紀要、査読有、67巻、2018、33--43
https://muroran-it.repo.nii.ac.jp/?page_id=36

(3) 三村竜之、複合語アクセントの意味・修飾構造：ノルウェー語 Sandnes 方言を通じて見た諸問題、室蘭工業大学紀要、査読有、66巻、2017、129--138
https://muroran-it.repo.nii.ac.jp/?page_id=36

(4) 三村竜之、アイスランド語における無声歯茎ふるえ音の音韻論的位置付け、室蘭工業大学紀要、査読有、65巻、2016、59--66
https://muroran-it.repo.nii.ac.jp/?page_id=36

(5) 三村竜之、アイスランド語における文音調(イントネーション)の記述に向けて、北海道言語文化研究、査読有、14巻、2016、147--158
<http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/journal.html>

〔学会発表〕(計8件)

(1) 三村竜之、ストレス(強さ/強弱アクセント)にまつわる諸概念の整理と問題提起、北海道言語研究会第15回研究例会、2017

(2) 三村竜之、アイスランド語の疑問文イントネーションの特質、北海道言語研究会第14回研究例会、2017

(3) 三村竜之、アイスランド語における疑問文のイントネーション、日本言語学会第154回大会、2017

(4) 三村竜之、アイスランド語における子音連結の簡略化について：初期調査報告、北海道言語研究会第13回研究例会、2017

(5) 三村竜之、修飾部に置かれる複合語アクセントについて：デンマーク語から見た共時的事実と通時的解釈、日本音韻論学会音韻論フォーラム2016、2016

(6) 三村竜之、アイスランド語における無声歯茎ふるえ音の解釈について、日本言語学会第150回大会、2015

(7) 三村竜之、アイスランド語文音調(イントネーション)に関する覚書、北海道言語研究会第11回研究例会、2015

(8) 三村竜之、アイスランド語文音調序説、国立国語研究所プロジェクト共同研究第2回研究発表会、2015

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者
三村 竜之 (MIMURA, Tatsuyuki)
室蘭工業大学・大学院工学研究科・准教授
研究者番号：00647662

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：

(4)研究協力者 ()